メディアとしての空間(2)

「狭小空間について」

デザイン学科・スペースデザインコース

定　松　修　三

A Study on Space as Media　(… the small spacing)

by Shuzou SADAMATSU

目　次

序

空間メディアの状況

情報としての空間の大きさ

1章　広い狭いの観念と感覚的判断

狭小空間に対する憎悪

狭小空間であることの意味

狭小空間の正のイメージ

2章　広さに関わる空間言語

広い空間を表現する語

狭小空間を表現する語

広い狭いに関わる情報の語

むすび

参考文献

序

空間メディアの状況

今日，われわれの社会にはフィジカルな意味での飢えや不足はない。だが人々には心の飢えがあり〈意味のあるもの〉を求め彷徨する。

意味のあるものは，しかし，時を経ず意味を消失し，人々の彷徨が続く。われわれはこのような記号的消費形態が社会的な経済成長に力を貸すのを違和感もなく支えている。また社会の中に競い生きる個人のごくささやかな欲望が伝播し，連鎖反応し，意味を作り出し，流行という社会的力を形成し続けるのを楽しんでいる。

そういった〈意味のある消費財〉は実用性は二の次に記号構築性の高いものへと変身脱皮を繰り返す。また，生産流通も消費財等のリ・デザインを繰り返しながら，その記号的消費を促進させる。

そうした風潮は空間も例外とはしない。住空間も記号構築物として多様な意味や価値を生み出す対象となっていく。

既に今日，住まい空間の消費財的様相の成行きを解した産業は戦略的ラベルを張り付け，空間商品の流通市場を造りだしてきた。その市場の中では住宅は他の商品と同様に〈意味のある消費財〉の姿形を得ている。

空間は本来的に〈もの記号体を集合する記号表現体〉の役割を持っていて〈ものの舞台〉として意図する意味を表すことができるのだが，空間自体がその姿形でもって記号商品と見なされる事態があっても不思議ではない。

もちろん，経済市場で〈住まい空間〉がいかに有効な記号商品と見なされようとも，過去30年間，ものがエンドレスに消費をつくりだしてきたような状況になるとは考え難い。しかし，空間は人心を吸引する力が大きいので，自己の表現メディアとして活用できる商品として尽きぬ魅力がある。

その住宅という空間商品に，生産側がラベルを貼った（特定の意味を付けた）ということは，空間が既にメディアとして活用されていることを示して

おり，消費側も住宅を安全居住を目的とするより，意味を探り，流行の動きを楽しむ視覚メディアとして認め始めてきたものと理解することができる。

そうした流れの中で，住人が自らの空間メディアを活用し，レベルの高い表現を競う事態になれば，われわれの環境は現在より遙かに美的で楽しいものになり得るだろう。

世界の国々の例を見ても，個々の空間が社会的文化価値を高めている状態は，その社会の高い成熟度を示しているように理解されるものである。

ここで誤解のないように言えば，空間は表現する行為のみが文化的価値を負う訳ではない。表現されるものの価値は社会の方にその情報を読み取る力がなければ生じない。

よく言われるように，空間は意図して表現されたものでなくても，自然体のままであっても何等かの情報が詰まったかたまりと周知されるが，しかし，人々は通常はその情報をあえて読み取ろうとはしていない。

しかも空間情報なるものは，多くは能動的に働きかけることなく静止的で，多分に陰喩を含み，知的でもあり，感覚的でもある。それらの細かな情報が絡み合い輻輳した状態にある。

考えるに，それを読み取るには文化的蓄積，教養の豊かさがものをいうに違いない。

しかし，われわれ日本の民族的，社会的傾向は，本来的に，表現することが苦手であり，また，それ以上に表現されたものの情報解読を苦手とする傾向がある。いわゆる空間文化に馴染みの薄いわれわれの社会では今日なお，空間情報が正当に交わされる事態にはなっていないのである。たまたま何等の意図もなく，受動的に読まれているだろうという程度ならば考えられる。つまり，一般的には，意図して表現することは少なく，勝手に読まれている（もちろん正しく読まれていない）ことはままある状態といったところだろう。

当然これらの情報の多くは社会化されず，その情報解読のための情報も圧倒的に不足している。

というのも，わが国の初等的教育では自己表現や人間解析力を身に付けるような教育にはほとんど取り組んでいないのだが，一方，こうした生活の知恵を教育すべき社会教育が，今日の日常的生活の中では全く行われなくなってしまっていることも問題としてある。がしかし，ここではそれを論ずるものではない。

さて，このように，われわれの今日の社会では，空間メディアが活用されている状況にはない。あってもごく一部の現象で，一般的なものではない。

そういった社会的成熟を要する生活感覚は，経済的豊かさを手にいれた現在であっても，一朝一夕に身に着くものではない。

しかし，今日になって次第に，マスメディアの多くに空間メディアを活用するための情報が取り上げられるようになってきた。人々が高い関心を持ち始めたことは事実だ。だが，残念なことに，それは西洋のインテリアデコレーションに偏りがちで，人々の願望が手の届く範囲で試行できるような常識に欠ける。即ち，イメージと，現実(自分)とのギャップが大きくなり，人々は空間表現を観念的なところで放棄してしまう恐れがある。誰しも西洋の空間と，われわれの空間との条件の違い，例えば空間の大きさの違い，習俗や感覚がもたらす差異などを，鈍感に無視することはできないからである。

マスメディアの多くがこのように実生活と乖離した空間情報に価値を求め続けている限り，一般の多数が空間メディアを自分の手の中に置くようには，なかなかなれないだろう。

今後，空間デザインに関わる者は日本における自然体の空間の，身辺の些細な事例や様態を考察し，知識を整理しながら情報の意味と価値を判断し，それらをわれわれの生活に関わる社会的教養として提示しいく必要があることを考えなければならない。

情報としての空間の大きさ

さて，空間の原初的な情報価値をごく常識的に問う場合，誰もが空間を形成している原則的な様態，つまり，かたち，大きさ（広さ，高さ），質（空間を形成する全て）を挙げるだろう。

中でも，人間一人一人にとっての絶対的な価値を問えば，〈広さ〉と答える人は多い。

なぜなら〈広さ〉は人間が空間に託す原初的な問題であるからだ。現在この上なく安全な社会の中で生きることができる人々も，自己の生命維持はまず空間容量に託さざるを得ない。誰でも自らの空間のあるべき本質を放棄する訳にはいかないのである。

言うまでもなく人間個体は，自らの身体周囲にパーソナルスペース（自衛領域たり得る広さ）を確保し，そうして〈ひと〉や〈もの〉との必要な距離を取り，更には絶えず自分との優劣を計りながら状況を読み，身を処している。

このように身の回りに確保している空間を，いわば個人の生存能力に関わる第一次的領域と考えれば，第二次的領域として確保しているのは対自然，対社会への身体防衛上の必要な広さの空間を有効な障壁で囲う部屋や家屋などであろう。

この人為的な領域空間は視覚的に形質の情報価値を生じさせ人間間相互の優劣を発現させる機能を発揮する。人為的なものであるが故に記号化現象を避けることができない。しかも，その室内の〈広さ〉は本質的な意味の筆頭の情報価値を生み，領有する空間の〈広い〉〈狭い〉は人間関係に大いに影響するのである。

さて，空間を領有する者はその空間が狭いより広いことにおいて他より優勢になることは一般解として自明である。

しかし，それも一概には言えない。領有する空間に身を置くとき，広過ぎればときに恐怖に曝されることもあり，また狭過ぎれば活動を制せられ，危険に遭う。むろん適正がよいことは言うを待たないが，それも時代や地域を隔つと，その適正な判断の感覚や意識が異なる場合もあり難しい。

従って，ここでは人間の一元的な価値判断を基準にせず，むしろ逆性的価値を検証しながら，その意味や価値を判断すべきなのかもしれない。

そこで，世界の現実を注視すると，地球上の大多数の人々は苦境の悲惨な生活に追いやられながら地底的に文化を支えてきていることを知る。

広く人類世界に領有空間との関わりをたずねると，そこには〈広い空間〉ではなく，現象としての〈狭い空間〉の問題があるようだ。

もちろん狭小空間には負の意識だけではなく正の思考によって築かれたものもある。

いずれにせよ，そこで〈狭い空間〉を見ると人間の複雑，陰がザクロの実のようにしまわれている感があり，割って一粒一粒を覗くと人間の生活空間の猥雑さや，厚みを見る魅力がある。

つまり，空間の〈広さ〉の文化的コンテクストでは，広いということよりも，むしろネガディヴな狭いということの方に情報価値があり，狭小空間の意味記号がネガティヴなかたちにせよ，空間の広さに関する情報を支えていることを知るのである。

小論ではこの狭小空間を俎上に乗せながら，空間の広さの持つ本質的な意味と価値を考察していくことにする。

1章　広い，狭いの観念と感覚的判断

人々が内に抱える欲望と，自領空間を広く取る行為はもちろんつながっている。しかし，領有空間が広い方が優勢であるからといって，人々が際限なく拡大化競争に突入することは少ない。

社会には自己の空間を広くすることだけが問題解決への唯一の道だとは思わない通念がある。

むしろ，自己を守るべき空間は広さが過ぎると，肝心の身を守る障壁が遠ざかり，空間が制御し難くなることをなんとなく恐れたり，また，広い空間は，茫漠としてとりとめなく，身の置き場すら失いそうな，恐い，うつろな空間になることもある。そのような経験を持った人も多い筈である。

広さに結び付くわれわれの感情は，たまたま，バシュラールが『静寂』と言う語のため，アンリ・ボスコの散文詩を引いたときの言葉を逆読みするとそのまま当てはまるだろう。「静寂ほど果てしない空間の感情を暗示するものはない。…静寂の中でわれわれをとらえるのは，宏大，深遠，無限の感覚である。（ガストン・バシュラール／[空間の詩学]）」また，イーフー・トウアンは『自由』と言う語を

当てる。「…空間の広がりの感覚は自由である感覚と密接に結びついている。」だから「家具調度で一杯の部屋は広々していないのに対して，がらんとした大ホールや町の広場は広々としていて，自由に振舞うことを許された子供は，喜んであちらこちらと走りまわるものである。」と，広さには開放，自由，人々の希望があり，動きの自由を求める明るさ，活動性があるように感じる。しかし，彼はまた「…健康な人は，束縛と自由を同時に歓迎する。つまり，場所の範囲が限定されていることと，空間が開かれていることを歓迎する。それとは対照的に，閉所恐怖症の人は，小さな狭い場所を抑圧的な閉じ込めようとするものと受けとり，暖かい友情や孤独での瞑想を可能にする閉じられた空間とは考えないのである。広場恐怖症の人は，開いた空間を恐れる。開いた空間は，広場恐怖症の人にとっては行動を可能にし自己を大きくするための場所ではなく，むしろ，自己の危うい統合を崩しかねないものなのである。(イーフー・トウアン／[空間の経験]－広がりと密集)」と開かれた広さ，閉じた狭さのマイナス面を指摘することを忘れない。

ボルノウは人間の欲望に対応している広さに言及する。「広さとは，人間のやみがたい膨張衝動にたいして，すなわち，人間が空間へむかって征服的に進んでいくことにたいして，もはや対抗物が何もおかれていない，運動の場が開いていることをつねに意味している。(オットー・フリードリッヒ・ボルノウ／[人間と空間]－広い世界)」そして彼も「…大きな空間はくつろげない作用をおよぼしがちである。ある程度の小ささは，住ごこちのよさにとってむしろ有利であるように思われるが，しかし小さすぎるのはやはり不安をおぼえさせるように作用しがちである。したがって空間は，そのなかに住んでいる人間によって現実にもその生活で満たされうる程度の大きさでなければならない。(同－家屋のやすらぎ)」と言い，広さに向かう欲望を牽制する。

空間が広いということはポジティブなテーマになるが，空間を自己のものとして考えるとき，あるいは内に向かう心にとっては逆作用をもたらす。

つまり，広さは空間の表の論理を表出させるにふさわしいものの，質を問い精神的なものを語るに適しない。

他方，〈狭い〉ということは，閉じ込められ，不自由な状態に陥る方向にあるのだが，人間同士が暖かく寄り添い，守り合い閉じ込もる時に，その閉鎖的な空間が生きてくる。

もちろん，狭さが過ぎれば人々は生活不能状態となる危険を恐れ，不安を感じる。

さてしかし，過去の地球上の圧倒的多数の人々は，先述の如く，比較的狭小な空間によって身を支えてきたのだ。

過去の人々は自らの広さに対する通常の感覚を人間関係や，日常的なものとの関係の中で経験的に身に着けた。また，空間の広がりが自身の身体や行動にどのような快をもたらすか，更に多数の場合はどうか等，体験を通して身体に蓄積してきた。もちろん，それらは動物的な勘ではなく，人間的な知的な感覚を育んできたのだが，だからこそ，空間の多様な要素と人間の多様なありかたの複雑さを巧みにこなし，掌握し，整理もしてきた。結果，現在のわれわれの空間に対する多様な通念を築いてきたのである。

その社会通念は，いつでも，人々の広い狭いの個人的な空間認識やその他の個人的な思惑や感覚の判断に重なって表出してくる。つまり，個人が自己の思惑に社会通念を取り込み，結果はあくまで個人的反応ながら，およその類型的反応を保つことになる。

ところで，このようなかたちで身についているわれわれの〈広い，狭い〉の判断だが，意外に物理的，計量的な広さ表現を取ることは少ない。どちらかといえば心的判断，感覚的解釈の曖昧な表現に傾斜している。

もちろん，人間が空間を得ようとするときは，当初にその目的性，機能に即する数学的広さ空間を設定し，その実現に努力するのだが，結果の価値判断は物理的な目標達成のその客観的な評価だけでは済まなくなるのが空間たるゆえんである。

特に自分の空間の価値判断になると性格や育ち

環境の経験など，極めて個人的なものに準拠した感覚的判断にすっかり支配されてしまう。

当初の(さし当っての)数学的空間はいわば殻であり，空である。人が入る前には数値は主要な価値付けの意味があるが，しかし，人間のものとなるや，空間はすぐさま自分化され，匂い付けされ，その人の包みものとなり，そして中に包まれた人間の思惑が全てを決するのは当然である。

そこで，人間の空間は千変万化の相を得，例えば〈小空間〉といえども〈狭い空間〉ではないのかも知れない。事実，そういうことは多い。

狭小空間に対する憎悪

さて，その狭小空間が人々の心にプラスの方向に作用するということを想像するのは一般的に言って難しい。通常は逆のマイナス方向に働くことばかりを想像してしまう。

誰でも社会的な観点から狭小な住まい空間を取り上げるときは，憎悪の対象にしがちである。

狭小な住まいは貧困であったり，無知であったり，無気力であったり，そうした困った状態と結び付きやすいからである。

かと言って，われわれは社会的基準として人間一人に対しどれ程の広さの空間を適当と見なすべきか，今だに明確な基準を持っていない。

身一つの空間は「立って半畳寝て一畳」と言う。

人間一人の空間として生活権等を無視すれば，最小空間とは，もちろんこの通りのものに違いない。しかし，人々がイメージする最小空間というのは人が生活するための空間，つまり，最小の部屋であり最小の住まいであろう。

その，生活を容れる空間であれば最小の生活用具，即ち，夜具，僅かの替衣を詰めたバッグか箱，鍋釜調理具，少しの食器，洗面具，それに若干の仕事のための器具は最低限備える。そこで，座も要る，台も要る，或は自己以外の人間の場も要る。どれ程切り詰めても一坪や一坪半のところが想像的限界域であるように思える。

しかし，フィクションを遙かに越えるカプセルベッドという宿泊施設がドヤ街のカイコ棚そのままに生出するという現実もある。空想的所作を超え，現実的存在となった限界空間は人間の尊厳を危うくしかねない。だが，これで人間が蓑虫のような生活を余儀なくされても生きてゆくことができる可能性ができたと考えることもできる。そこでわれわれは未来に起り得る最悪環境に照合して想像に努めてみるが，それでもそれはやはり憎悪すべき空間量であることに変わりはない。

だが，依然，狭いという空間量が明確にならない問題は残る。更に，〈狭い〉と言う用語もただ単に小さく窮屈な空間を指すにとどまらず，種々のネガティヴな感覚を複合する表現語として使われる傾向がある。それに，狭いという判断がひとりひとり主観的で曖昧であり，どういった狭さか，何に対し，何処と比較して狭いのかも不確定なまま表現される。そこで，それら曖昧な〈狭い〉という表現をつきつめていくと，生命に関わる根元的な寸尺とは程遠いところのいろいろな欲望のかたちも浮かび上がってくる。

狭い空間だからこそ雑多な人間の思いが入り込む余地があるのだ。割り切ることのできないわれわれの心が空間にそのまま表現される。

もっとも，一般的には欲望の一かけらも入る余地のないのが狭小空間だと捉える思考が多い。そう捉えざるを得ないような，人間の生を脅かし，危険ぎりぎりの狭小空間が文明社会には病巣のように存在するのは確かだ。いくら理想高い社会においてもそれを皆無にすることは難かしい。文明社会ゆえに生ずるこれらの劣悪最低の狭小空間は，確かに人間の空間とは呼べない。それらは社会の構造的欠陥，あるいは変動によってもたらされる理不尽なものと，自らの社会を糾弾する人も多い。

ここではそうした中の，たまたま短期間に出滅する劣悪な，例えば廃材利用のバラックなどの，非人間空間は除外して考える。それは先に述べたように人間の思いが入ることのできない，メディアたり得ない空間であろうと考えるからである。

しかし，それを除いてもなお，怒りの対象となる狭小空間はある。それは普通の人々が生活上のささやかな欲望を封じ込めている空間意識が言わ

せる〈狭い空間〉である。

犬養道子の［ラインの岸辺］という書の中で，著者はこのような怒りを書いている。

「…もし，『ヨーロッパ式の住』という，あいまいな表現を使うことが，あるていど可能とするなら，それは，日本人がさいしょに思いうかべるような，形や色やインテリアデコレーションではないのである。あいまいながらに『ヨーロッパ式の住』の共通性をさがそうとするなら，浮かび上がるさいしょのものは，ひとりひとりにわりあてられる空間の広さである。そのいみでのゆたかさである。

安らぎである。安定である。

そしてそれらは実は，『住』の最低の，最根本の条件ではないのか。…（ヨーロッパ式の住）」

このように，日本の人々の住に対する考えが広さにおいて常軌を逸しておかしいと怒る。

一方，クールな怒りもある。怒りというよりこれらは憎悪と言うのが当たるだろう。

早川和男は［住宅貧乏物語］の冒頭にいきなり「狭い住居は死の直接の原因となることがある。」と書き出す。

幼い子供たちが犠牲になる過密の例を挙げる。老人に危険な過密の例も挙げる。事故ばかりか殺人までも起きる狭い空間の命にかかわる事例の枚挙に暇がない。

早川は狭い空間は弱者を痛めつける非人間的なものであり，衛生を悪化させ，精神的にも多大な悪影響がある問題点の多くの証例を挙げる。

この書の目次の１章の小見出し，…核家族の不安，…夫婦生活の破綻，…建物の悪さと精神的圧迫，…乱される子供の生活，…狭い住宅に多い小学生のテレビ視聴率，…後退する言語表現能力，…荒れる子供の心，…下がる子供の成績，…過保護にさせる住まい，…人間の尊厳を傷つける，等々，狭小空間を原因とする悲惨な事実を，またとてもここには引用することができない程の件数を記載している。

この早川の［住宅貧乏物語］より４年ほど前に出された塩田丸男の［住まいの戦後史］にも狭小住宅の悲劇が取り上げられている。［住まいの戦後史］は1975年，［住宅貧乏物語］が1979年に出版されていて，もはや戦後30年以上も経ち，廃材を集めて建てた臨時のバラック小屋などはなくなっていた筈だが，当時の社会にはなお依然として劣悪な住空間に苦しむ人々が多くいた。

従って，狭小空間は社会に対する多くの不満と共に，現実の憎悪の対象として，まだまだ多くの人の頭の中で引きずっていた。

また同じ頃，加藤秀俊は［空間の社会学］の中の（高密度社会のとらえかた）という章で，高密度に置かれた場合の人間の社会的状況を多くの例を挙げ，そのストレス，事故の危険を語っている。

その「過密という病理学的現象の空間問題」の最たるものは，小さなマイホームであり，それを出て更に乗らなければならない，尻押し詰め込み通勤電車の過密であり，もはやそれには憎悪を越え，呆れ，日本の社会を案じるのである。

さて，われわれが狭い空間を利用せざるを得ない過密現象は，特に戦後の状況から始まった。それは主として経済的な問題であった。

しかし，本質的に人々の群れる習性などに起因する現象もある筈だった。例えば生命を脅かすものの存在に恐怖におののく人々が集合した場合は，集団は自律的に凝縮する力が働く。

政治的にせよ経済的にせよ，そうして生活しなければならない社会状況はスラムを生む。

こうしたスラムの狭小空間は先述の臨時的，非人間的空間に近いのだが，生活防衛上形成され，意志的に選択される狭小空間の形であれば，先の仮の，臨時のバラック等のものとは区別しなければならない。

いずれにせよ，過密環境は好むと好まざるとに関わらず，非衛生的環境に陥るが，もちろんそれは人間自身による汚染であり，その汚染による感染であり，浄化力を喪失したスラム環境は大変危険な空間となる。

スラムといえない環境においても，過密居住は肉体的，精神的，社会的に人間の尊厳を傷つける。

誰しも人間が人間らしく生活するためには，人

間にふさわしい空間が保障されなければならないと考え，そういう意味で，狭小空間に対する憎悪は社会に対する怒りに変じることもある。

社会に存在する狭小住宅を憎悪し，怒り，問題にしている人の多くは公的住宅信奉者であることも多く，住宅供給は政府が強く管理すべきだと考えるような論も多い。

しかし他方，人間自身の方に問題を見，空間をどう処しているかを考える人もいる。

確かに，狭小空間と劣悪空間は必ずしも一致しない。狭小空間を悪とみるか，人の住意識の貧困を嘆くかは，空間情報の読み，或は評価の方向を大きく違える問題である。だが，時代の流れと共に，人々の住意識は変わっていくに違いない。そこで，われわれの社会の過去の小空間の証例をピックアップして，狭小空間の評価，人との関わり，存在の意味等を考えてみることにしたい。

狭小空間であることの意味

わが国には，まず，国土が狭いというイメージがある。数値上ではなく感覚的につくられている。世界地図の上の細長い島状の形は視覚的に狭小なのである。

土地家屋に対する狭小感覚もそこにつながる。

他国の情報にみるさまざまな家屋もわれわれのものとはスケールの違う大きさであるようにとれ，日本の生活空間は世界の国々に比して狭小な方だという観念がわれわれを支配している。

従って，欧米の人がわれわれの住まいを兎小屋のようだと狭小劣悪イメージで表現しても，多くの日本人は自虐的に肯定するばかりである。豊かさの自信を身に着けてきたにもかかわらず，自分達の住まい空間の貧弱さだけは取り残してきたと自認せざるを得ない。

例えば上田篤は著書［流民の都市とすまい］の中で，「もう何年か前のことである。日本の住宅を視察にきたあるイギリス人の建築家が，視察ののち帰国にあたって，日本の住宅にたいする感想をもとめられて『ようするに，これはみんなオースチア・ハウスだ』といったことがある。」といったふうに，彼らが捉えた感覚では日本の住宅はオースチア・ハウス（耐乏・禁欲住宅）のように見え，建築材料のチャチさ，壁の厚みのなさ，室の絶対面積の狭小，収納室の不足，住宅の密集など，諸例をあげ，日本の住まい空間の貧弱さを説明する。

このように記すのは上田だけではない。多くの建築家や識者がわが国の住宅が欧米の国々に見劣りするのを嘆く。このような識者はいわゆるレベルの高い人々であり，目の前の現実と自意識のギャップに苛立つ。

われわれはわが国の建築文化について，広大な神殿造りの流れ，端正な書院造りの流れ，壮大な城郭造りの系譜と，いずれも立派な建造物の空間文化を誇りに思っている。

その結果，今日の住空間の貧弱さがわが国の今日の文化の貧弱さを語っているように思考する弊に陥る。しかし，実際のところ，われわれの家屋の変遷は特殊な支配層のものを除けば，大方はごく質素なものであった筈である。

近世からの庶民の空間はつい最近まで引継がれて身近に存在していたように思える。近世は既に一般的な建造技術も高度なレベルにあり，経済的にも普請できる人が多かったが，寛英19年には町村諸法度で「不似合家作自今巳後拵仕間敷事」と禁止され，以降，庶民の家屋の造作には細部にわたり多くの制限事項が設けられていく。

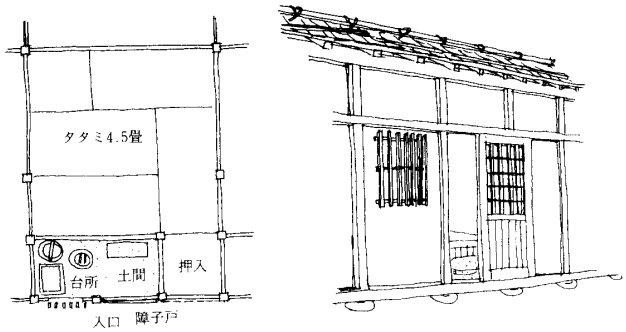
川越政則の［南日本文化史］によれば当時の記録書に「農民の住居は雨露さえしのげばよいのであって，板敷などをつくることは百姓の分にすぎることであり，土座にして穀物のカラを敷きそれを肥料に利用せよというのが概略の意見」として残されていることを記している。感心するほどの徹底した省資源思考を押し付けている。これが倹約を弱いものにのみしわ寄せした非情さを除けば，乱開発，乱費で国土を荒廃させることのなかった姿勢の点はむしろ評価すべきことかもしれない。

その近世以降の都市下層の典型と言うべき小空間に目を向けてみよう。

［歴史公論・日本人と家］に載っている吉原健一郎の［江戸の長屋］から引用させてもらう。

「長屋は〈九尺二間の裏屋〉といわれたように，ひじょうに狭い住居の集合体であった。裏通りや路地の奥に，いわゆる〈割長屋〉〈棟割長屋〉が多数建てられた。割長屋というのは，長屋を横割りにした住宅であるが，棟割長屋は棟の線で縦に分割し，これを横割したもので，両端の四軒をのぞいて，他は三方が薄い壁で仕切られるという，もっとも居住条件の悪い建物である。」また「〈九尺二間〉とは面積三坪（九・九平方メートル）であるが，畳の敷いてある部分は四・五畳であり，あとは入口・台所・押入れが半畳ずつということになり，なかには押入のない家もあったようである。しかも，そこに二世帯以上が住むという現在では考えられないことも存在した。飲料水は共同の井戸(水道の水を引く）が外にあり，雪隠（便所）も屋外で共同使用であった。」とある。

図にすれば１図のようになる。これでは今日の生活は成り立たないだろう。だが，これらの住まい空間の程度は多かれ少なかれわが国の庶民生活の様子を示しているものだと思う。



（図１）江戸の長屋　概念図

何よりも長屋住まいを志向させるものは，庶民仲間の共存意識であり，帰属意識である。同類の或は全く同じ小空間に，日々生活を共にする喜びや楽しさを分かち合う。そこには落語などにあるように，気が置けない，人情的な，楽天地世界がつくられている。もちろんそのことは狭小空間を求める理由には直結しないが，狭小空間の集合体故にそうした楽天環境が形成されるのは，狭小空間・長屋を求める人々の心が連携するので，狭小空間が鍵になっていると言うことはできる。

時代的に飛ぶが，同じ［歴史公論・日本人と家］に載る山本明の［昭和初期の住宅］から，関東大震災後の新中産階級の文化住宅を取り上げてみよう。「当時さかんにつくられた文化住宅とはなにか。それは木造モルタル塗り，多くは二階建て。入口のドアを開けると小さな玄関，靴をぬいであがると，その横に四畳半か，せいぜい六畳の洋間。これを応接間とよぶ。玄関から中廊下を奥にすすむと，二，三室の和室。台所は〈東京式〉（土間がなくて，流し台やガスこんろが住まいの平面と同じ高さにあるもの)。二階も一，二の和室。」ついでに「大宅壮一は，1929年に［サラリーマンの生活と思想］という文章で，この文化住宅をつぎのように皮肉っている。『東京の郊外を歩くと，いたるところに，型ではめてつくったような和洋折衷の半バラックが並んでいる。…その多くは和洋折衷というよりも，三室ばかりの日本家屋に，赤瓦の四畳半若しくは六畳位の〈洋室〉をつぎ足したもので，外から見れば洋服を着て下駄をはいたような感じである。いわば，その家の主人又は主婦が，英語を知っているのとほぼ同じくらいの程度において〈洋風〉が加味されているのである。そしてこの〈洋風〉の〈応接間〉には，三脚ばかりの藤椅子と，二三種の円本全集をもってファーニッシュされていることはいうまでもない。』」というような当時の風俗描写が併せて書かれている。

当時の社会の知識層，即ち，昭和初期の新興のサラリーマンが利用することの多かったこのような，せいぜい18坪ばかりの小空間の出現は新興層が新しい時代の生活設計を求めた意識と重なっている。

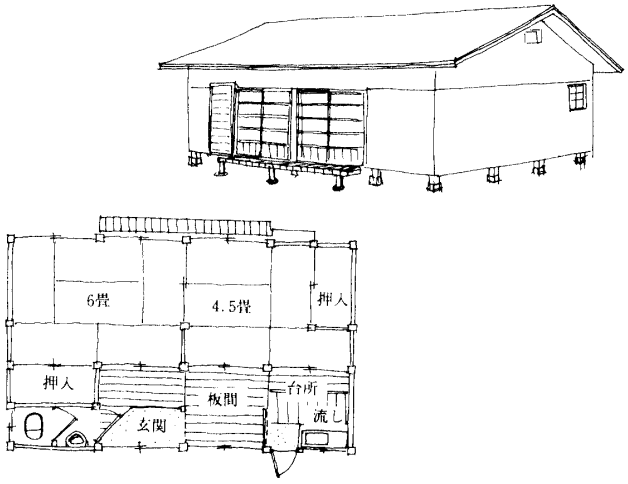
即ち，時代の節目の新しい意識を伴うこうした住まい空間は，多くは新しい生活，新しい住まい意識を広める役割を科せられていた。またこのような社会啓蒙的な役割空間は，広さや構えより合理性，機能性をまとう小空間がふさわしかった。

そしてその小空間はやはり，人々の新興文化を支える有意識層への帰属意識を満たしたのである。

ともあれ，住宅は個人にとっても国にとっても経済力がものをいう。狭小空間と劣悪さを嘆くの

は国の経済力を嘆くに等しいことでもあった。

現代はまた最悪の事態を迎えたときがあった。戦後応急住宅として現れた住まいの一例は2.5間，4間の10坪，部屋は畳が6畳と4.5畳，板張りの2畳，台所，便所，玄関のたたき，それに押入という極小住宅であった。黒沢隆の［2 DKの意味・戦後住宅の変節］に載っていた上記の例を写すと2図のような間取りである。その上，これは応急住宅であるからひどく劣悪な資材で建てられている。



（図2）戦後の応急住宅

俳優の小沢昭一の『わた史発掘』という自伝記の中にそうした応急住宅の一つに住んだ経験に触れたところがある。「…池袋駅から護国寺へ向かう大道りの右手奥に小学校の焼け跡地があり，そこにマッチ箱のようなバラックが，たしか二十戸ばかりに建ったのである。その南端の一軒を借りて，久しぶりに私たちは親子三人水入らずになった。応急簡易住宅は，六畳と三畳と一坪の土間が，板で簡易に囲われただけのもので，天井はなし，屋根はコールタールを塗った紙がトタン代わり，床は畳なしのムシロ敷き，だから，風は四方の板張りのスキ間から，そして床下からも吹き込み，紙の屋根は間もなくめくれて，雨もりがするどころか，穴から空がチラチラ見えた。…」

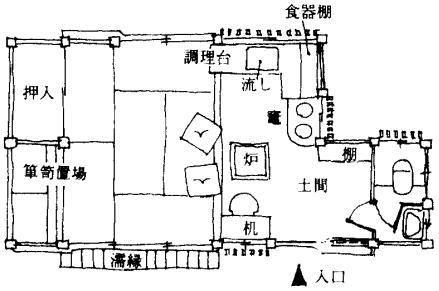
今日ではあり得ない住空間である。狭小な住まい空間が狭小なりに成り立つには，質が狭さを補うだけの配慮が必要だが，終戦直後は一切の余裕もなかった。だがこれらの小空間はこれでも，やっと手に入れたうれしさに満たされた。うれしいと狭小ということは結び付かないとしても，比較の問題，或はないよりはましという社会環境の場合，狭小空間でもうれしいという場合もあり得る。

それは必ずしもネガティヴな意識ではなかった筈である。

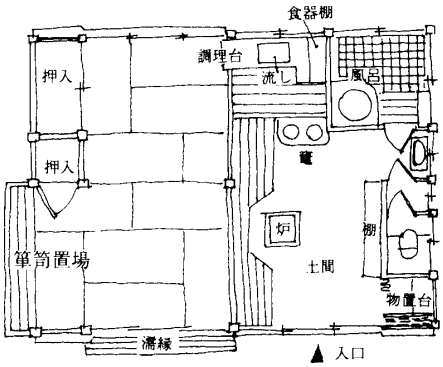
しかし，そのような最低生活さえ不能な社会的極貧時代の中で，耐え得る最低限生活を成り立たせるための〈最小限住宅〉の研究や提案が始まる。

中には試案を小冊子にまとめて訴える人もいた。

安東勝男は今和次郎の推薦を受け［小住宅］という書を終戦の翌年に出版した。急がれる復興期にどのような概念をもって住まいを建てるべきかを提唱したのである。例えば，「…客に対する個人性（ぷらいべいしい）のれべるを大幅に引下げる事，即ち接客の構へを崩して仕舞って，もっと楽な構へ方をする處にあります。…」と言った風に，いわゆる形式主義を廃し，玄関，取次ぎ，客間，を団らんの場に廻せと言う。そして「能率的な勝手向きの構へと安楽な居間の構へと，この二つを考へる時，快い生活を規制し得べき計畫の根本は何處にあるかと云ふに，現在の材料入手難とその値の高騰及び人手不足等の困難，及び接客構へ，連絡廊下等の除去に依る面積節約を睨み合せた場合，土間の活用と云ふ結論に帰着させ度いのであります。」こうして7坪から18坪までの土間を基本にしたプランを展開している。参考までに，一二の図例を写し描きしてみる。3図は7坪試案の一例で



（図3）安東勝男小住宅案7坪



（図４）安東勝男小住宅案 12 坪

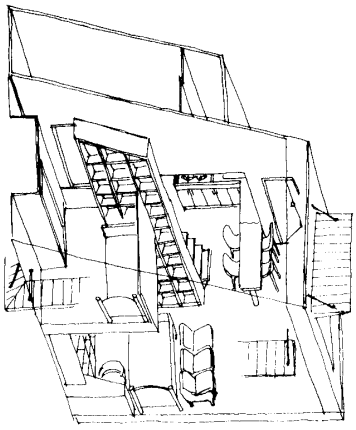
あり，４図は12坪の試案の一つである。

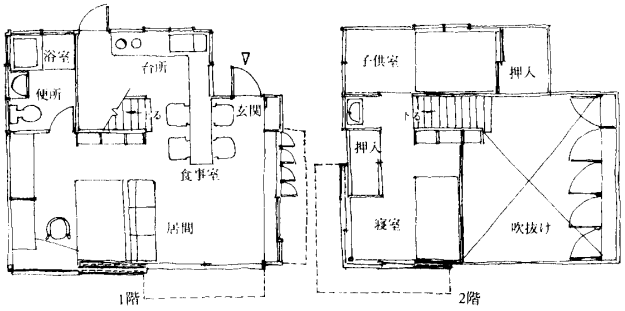
これらはもちろん実際の建築ではないが，未だ情報の少ない期に人々に大きな刺激を与え得たことは想像に難くない。倣って建てた人が居たとすればそれはひとつの思想表現体であり，シンプルな小空間であればこそ可能な表現であったろう。

また復興の進行著しい中で話題を呼んだ小住宅を上げてみよう。池辺陽氏の『立体最小限住宅の試み』である。５図にみるこの家屋は，1950年に第３番目に提案した，つまり№３の実験住宅だが，14坪の，中二階と吹抜け居間，科学的姿勢と合理性を追求した『新しい生活＋最小限スペース』の形が，まさに来るべき新時代の夢を人々に与えたのであった。

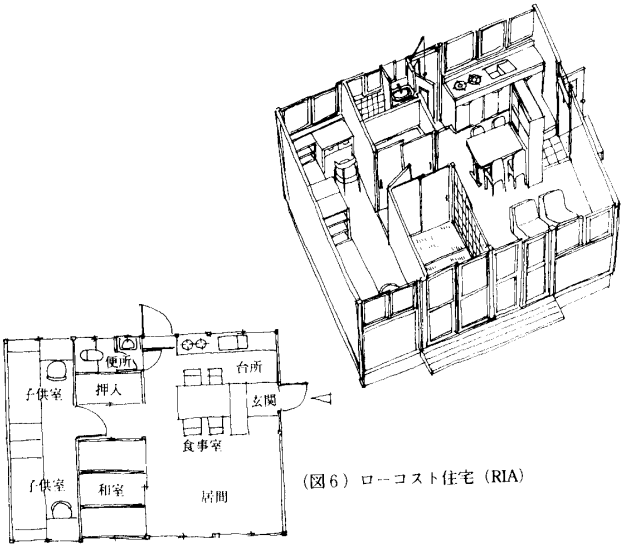
同様にローコストを追求する幾多の試案の中からもう一上げたいものがある。６図の RIA 建築総合研究所設計の12坪のローコスト極小住宅だが，これは1952年のもので，空間の性格と個室空間，汎用空間（リビングなど）と中間空間に分け，適切な配分をもって空間を切り詰めローコストを実現し，当時最も意味のある試みと賞賛されたものであった。

こうした新しい提案は，主として［モダンリビング］等の雑誌を通して発表された。この雑誌はもちろん一定枠の人々を対象にしたものであったが，このような啓蒙誌だからこそはっきりと当時の社会状況が極小の住宅を追求しているのを読み取ることができる。それに，実現していかなければならない必要の意味，それに共鳴した知識人達の思考の輝きなどもまた読み取れるのである。





（図５）最小限住宅（池辺陽）



（図６）ローコスト住宅

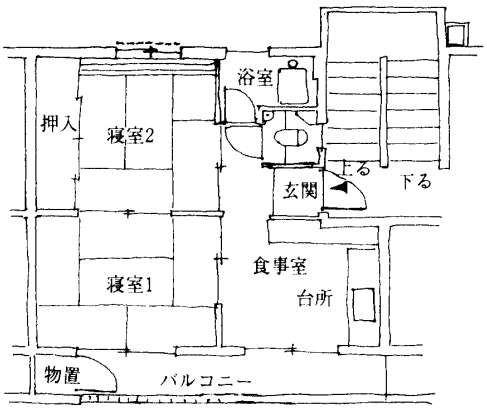
もちろん欧米においても1929年，CIAM（国際新

建築会議）が〈生活最小限の住宅〉をテーマにし，知識人達の狭小住宅研究ブームを引き起こしたことがあり，日本の知識人たちも当然その影響は受けていた。そして日本では，敗戦直後という当時こそ近代合理主義に則った生活機能優先の思想をかかげ，標準・画一化へのデザインをめざす，まさにその時を得ていたのであった。

いずれにしても，池辺や RIA やその他の気鋭の建築家の手になる空間は，小空間であるが故に，その合理性，進歩性を視覚的に確認し得て，誇らしさと喜びを得られたのである。更に，［モダンリビング］等のメディアに載る小空間思想の進歩性が誇らしさを倍加した。

このような先端思考の影響下で，建築産業は工業化，即ちプレハブ住宅や集合住宅化へ，ローコスト，合理化の流れを築いていった。ちなみに1946年頃から前川国男の設計によるプレモスという木造のプレハブハウスを代表に幾つかのプレハブ住宅がそれぞれ短命ではあったが出現した。もっともプレハブ住宅が本格的に産業化したのは1960年過ぎである。

一方，国をあげてのコンクリート集合住宅建設は公団発足の1955年から本格的に始まり，標準の2DK タイプが日本の住宅の代名詞にまでなってゆく。



（図 7 ）公団住宅（55.3 N-13 坪）

7 図の〈55・3N〉型式の 2DK 居室は13坪である。しかしここにはステンレスシンクの厨房セット，浴室，バルコニーと，当時全ての人が憧れた設備が付いていた。しかも DK，即ち，ダイニングキッチンは新しい立式生活へいざなうムード空間であった。この小空間は，圧倒的多数を待たせながら，抽選で少しづつ供給を続けた。この小空間は恐らく当初は手狭とは言えなかった。まだ家電の三種の神器も十分には普及してなかった頃である。

だが一方，このように庶民に手渡すべき小住宅に対しておこなわれた真面目な研究・提案は，われわれの文化的伝統の空間形式の幾つかを槍玉にあげながら突き進んだ。例えば床の間は歴史的な意味が何であれ，訳の分からぬ象徴あるいは装飾的役割のスペースであって，もっと実質的な機能空間に取り替えられるべきものと考えられた。玄関もまた家の格の象徴的空間部位で，封建的な臭いを発散させる不合理なものとして排斥，縮小して当然と考えられた。機能主義を信奉した当時の社会思潮の傾向は格式主義，即ち，象徴的意味空間を非難排斥した。こうした当時の全体傾向を小住宅神経症などと称する人もいる程，小住宅のための合理化は一途であった。

だが当時，いろいろなメディアを席捲した〈小空間の住まい〉という目標や照準は，何も合理性追求の無味乾燥な思考だけのものではない。むしろ文化的装いを着け，イデオロギー的に情報化されている傾向すらあった。

現代のように都市化してきた生活群のその生活者にとっては，社会的にゆとりが出てきた中にもなお〈小住宅〉は高知識レベルの一種の記号産物であって，知的産物と認識される限り永遠のテーマであり続けると考えられるのである。

建築家たちのその産物には小住宅系譜とも言えるものがあり，狭小空間の意味価値の検証に取り上げたいものがきりもなくあるが，ここでは省略しなければならない。

狭小空間の正のイメージ

小空間の生出，または，小住宅の生成には当然，負の思考を背負っているものが多いだろうと考えられるのだが，先に少し見たように，正の思考と共に生まれてきたものも少なからずある。

また，空間そのものより，住まい方の思考の問題もある。

先出の［流民の都市とすまい］の上田は，実は，狭小空間よりはむしろ生活状況における貧民を憎む。いまや人々はプライバシーを意識し過ぎ，空間を一層細分し，独立させ，ゆとりのない貧しさをあらわにする生活者となっている。上田が厭うのはそうした生活の心の貧しさで，たとえ負の思考を重く背負った空間，経済的貧困から逃れようのない空間にあっても，心豊かに生活できれば，それは美や快楽に転換できるものと考えたい。

しかし今日のような経済繁栄社会において，いつまでも，或は以前にも増してそこに精神的貧困を見るのは救われないのである。

わが国には中世の世から精神的豊かさを貴び，風流を楽しむを美風と意識する伝統がある。

［方丈記］の鴨長明のごとく，欲望の赴くままに栄華・権力を追い求める生活から逃れようとしたとき，贅を尽くす空しさに心醒め，わが身を包む空間の広さもまた恥ずべき欲塊に思えてくる。

長明は仏教の故事に倣い，かつて方丈の庵に住んだとされる浄明居士を追い，極めて小さな空間の，方丈，十尺四方つまり4畳半を少し大きくした庵を自ら準備し，日野の山中に建てた。そしてその栖を方丈記に記すのである。

このように，世俗を離れ，自分だけの世界に籠る隠遁生活を選んだ知識人たちは平安時代末期頃から見かけるようになったという。こうした一種の社会逃避者たちは山里離れたところに身を寄せる空間として小さな庵をつくり住むのを望んだ。

世俗の富，権力に，なるべく遠いものに託して表現することに意味を持った。旅に身をやつすことの多かった西行，芭蕉，良寛なども，庵に身を置こうとした。総じて何もない狭小な空間こそ心を純粋にしたのであろう。

先の『オースチア・ハウス』という語に端を発した上田の思いは，同じ書で最後に，あれは耐乏住宅というのではなく，禁欲住宅と言うべきだと述べる。貧しさ，狭さを生かす考えを持てば住み良き社会の形成に役立つ。かつての町屋のように共存意識を持ち，連帯し，都市機能を高めるべきだと言う。ついでに，わが国特有の壁のない小さな空間もプライバシー過剰社会を厭う人にとっては理想の形に見えるようだという話も添えている。

庵空間に籠った隠遁者の生活はまさに禁欲的空間を求めた，その出発点であったのだろう。

木股知史は［現代風俗'90貧乏］という書に収録された『ワンルーム今昔』というエッセーの中で，ワンルーム（都市中に建てられた一室構成のマンション）とは「思想的な根拠から意志的に選ばれた居住空間の貧乏」だと言う。

木股は労働のために臨時にこしらえられる小屋がけ，仮屋や棟割長屋や木賃宿，また，ドヤのカイコ棚，などを引合いに出し，〈ワンルーム〉は都市の中では仮屋的，隠れ家的な心理的意味を持ってしまう〈都市の穴〉と例える。狭小空間であるがゆえの〈ワンルーム〉はいわば現代都市生活における庵と言えるものであろうか。現代の都会人には求道心はないが逃避心は確実にある。ワンルームマンションは豊かな生活の心を育むことにはならないが，ともかくそこは狭小空間であるが故に疲弊した人の心をいやす役を果たしている。

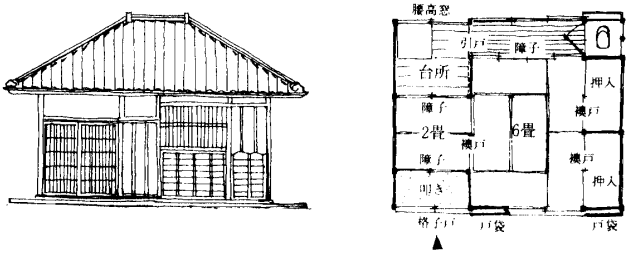
［住まいと暮しの民族学］の望月照彦は佃島の女二人の共同生活の住まいを訪ね，小さな空間における豊かな心を書く。その住まいは「女性二人住まいの家らしく，きっちりと部屋のそこここが片付けられている。…小さな玄関をまん中にして，三畳に少々欠ける台所がある。…玄関をはさんで台所の反対側に便所，…玄関のすぐ前が上がり間になっていて，四畳の広がりがある。このスペースをふたりは茶の間として使っている。奥の六畳が居間となっていて大きなチャブ台がデンと置かれている。…夜はこの六畳の間が寝室になる。…このふたりは，たとえ広大な部屋の幾つもある屋敷に住んだとしても，ほとんど今と同じスペースしか必要としないであろう。彼女たちにとって，今以上の空間はまったく不要なものであり，逆に人間の接合密度を疎外するものでしかないのである。…むずかしくいえば『等身大の思想』を，このふたりは長い人生の中でそれこそ自然に身に付

けているのだ。…」と12坪の空間の身の丈にあった暮しぶりとその心を称える。

現状に満たされた心を持つ人の生活は，空間を美しく整わせるのである。望月は「イギリスの経済学者シューマッハーのいう〈スモール・イズ・ビューティフル（小さいことは美しい）〉ということ，寄り集まって住むということを，そして再び都市の内部で暮らすということを考えてみなければならないだろう。…」と空間の拡大主義，郊外へのスプロールへ注文を付ける。豊かさを謳歌し，空間を広げ，しかし，多大な時間と労力を無駄に失う愚は誰もがおかしいとは思う。しかし，身の程をわきまえるのも，もっと難しい。

小空間は人間の思考との関わりについて意味のあるテクストになり得るようだ。

望月はまたいくつかの小住宅の計画からミニマルハウスの思想を取り出す。例えば，金子清吉の［日本住宅建築図案百種］から，第一図の7.5坪のプラン（8図）を見てミニマルハウスの思想そのものが具現されていると考える。それは決して極小劣悪を意味していないこと，そして，現代の状況がクオリティオブライフ追求の結果クオリティオブスペースに向い，都市住居を「完結した空間体と見なさないで，台所はレストランに依存し，居間は喫茶店に依存し，金庫は銀行に依存し，庭は公園に依存するといった風に，居住機能を相互補完的に分散することによってトータルに完成させている」のに対し，それは「住宅の内側に宇宙的世界を抱き込んでいく思想であるともいえる。したがって住宅の機能を際限なく広げていくのとはまったく逆の，住まいの機能を極力殺いでいく方向を持つのである。」というように捉える。



（図８）金子清吉最小住宅案 7.5 坪

ものや機能の膨張はスペースを比例膨張させる。

このような最小限住宅は生活機能のぎりぎりの限界を見つめる生活思想に裏付けられていなければ生出し得ない。先出の安東勝男［小住宅］の平面計画も同様の哲学がベースになっていた。

その先，望月は「実はミニマルハウスの思想の根元には物や機能のひとつひとつを殺いでいく，という考えや行為があるのである。そしてその最も結晶度の高い空間として，日本の茶室の存在を挙げることができる…」と茶室空間に及ぶ。

その茶室はしかし，熊倉功夫によれば茶の湯という芸能をおこなう空間であるから，非日常の所作を行うための特異なもの，というとらえかたになる。

そして，日常への逆説的なわび，やつしの美に心を傾け，贅を剝ぎ取り，簡素を願望する一時は，上流階層の人の平常の心との平衡を求める切実さが形になっていると理解することができる。

熊倉の［茶室空間の特異性］から，千利休の待庵について記したところを取り出してみる。

「（待庵の）二畳のうち一畳は亭主が茶をたてるための部分で，炉が切られ，道具が置かれ，亭主が座れば，それで全てが占められてしまう。客の座る空間は残りの一畳にすぎない。二畳が極小の茶室といわれる所以である。

常識的にいえば，一畳の客畳に一人の客，多くても二人の客が限界である。茶の湯に限らず，日本の座法は一畳に二名，すなわち一人半畳を基準とする。ところが二畳敷を発明した千利休は，この二畳の茶室に，客三名がふさわしいとした。常識を破る過密な数である。…」

そしてこの鼻がつかえるような狭さは密着感・連帯感を生じさせる環境となり，加えて茶室特有の閉鎖性の強い空間が芸能空間を完成させる重要な役割を果たしたと述べている。

茶をたてるという演出が前提であるにせよ，狭小な空間が非日常的転換によって精神の質的変転を可能にすることに注目すべきである。

ここに言う芸能空間と表現されているものを，『目的意図を達成させる空間』と置き換えてもい

い。日頃，小座敷での膝詰談判といったように，われわれの生活には狭小空間が効果を発揮する，類似の体験が多く存在する。杉本苑子の［利休・破調の悲劇］という書では「狭さがもたらす緊張感については，体質や体格，性格が違い，教養度も思想内容もすべて同一とは言いがたい二つの個性が，わずかな身じろぎ，おたがいの息づかい，体温体臭まで感じ取れるほどの接近を余儀なくされ，茶を点て茶を喫するという一つの行為のもとに縛られる息苦しさ，危険度の高さ…」云々，の記述を見る。

人と人が必然的に互いの個人空間を絡ませ，争わざるを得ない程の狭い空間は，よほど特別な条件下でなければあり得ないが，空間が人の日常を覆す力を持つ武器にもなり得ることを，われわれは理解しておかなければならないだろう。

2章　広さに関わる空間言語

広い空間を表現する語

広大な家屋を表現するのに，われわれの日常の言語は〈御殿〉とか〈屋敷〉とか〈城〉を比喩的に使うことがある。言うまでもなく，御殿は寝殿造りの貴人の住まいを指しているものだろうし，屋敷は壮大な武家屋敷を指し，城はもちろんものものしい城郭のありさまを指しているに違いない。

〈館／やかた〉も身分の高い人が住むべき豪邸，たまたま，西洋のレジデンスやパラッツオまでイメージされるような奥深い家屋敷を指して使ったりする。

〈邸宅〉は通常の敬意を表す語になっているが，どちらかと言えば，これもやはり，大きな住まいを指しているのである。

さて，家屋内部の場合は広い空間をわれわれはそのまま〈ひろま〉とか〈ざしき〉と呼ぶ。

場合によっては，これら〈ひろま〉〈ざしき〉はその家の空間を超えて，その地域の構成員全部の空間といったにおいを持つ。

大河直躬の［住まいの人類学］に「住居の間取りのなかには，特定のひと部屋だけを大きく作っているものがある。日本の過去に住居では，平安時代の貴族住宅における寝殿の中央の母屋と呼ばれた部分や，桃山時代の大名などの住宅の対面所などと呼ばれた部分がそれに相当する。現代の住居では，居間が一般に他の部屋より大きく作られる。これらの部屋は，多くの人を収容するために大きく作られたというだけでなく，その住居の中心としての役割をもつ部屋である。…（第三章・民家における大きな部屋）」とあり，それら大きな部屋の『日常居住用の居間』の方は『祖霊を祭るための部屋』よりは後の時代に形成されてきたのではないかと記されている処があった。

つまり，古代より地域ごとに選ばれた一部の民家が神と臨居するように造られ，時期がくれば祭りの場となる仕組みになっていることなどはよく知られているが，その神のための空間は最大限広く取らなければならぬとされていたであろうし，そこで祭りを催す結果，人の集まる場となり，多くの人を収容できる広間，座敷につながったのだろうと推測することができるのである。

そこでまた〈集会室〉や〈ホール〉など，多くの人が同室したり，出入りする部屋を表す語のイメージは広いと直結する。

ある地域の中で，選ばれた者に科せられた役割故に，その家屋の一つの空間が特に大きく広く認知されるのはそこにいくらかの公的な意味が含まれているからであろう。

広い空間の形容は〈広やか〉や〈広々〉，〈広壮〉，〈からりと開けた〉，〈すかっと見通しのきく〉などとやや肯定的な表現から，〈だだっ広い〉だの〈がらんとした〉，〈寒々しい〉，〈茫漠として居所の無い〉といった少し否定的な表現の語まで，多様な表現の語彙が用いられるが，広いが付くこれらの語が，どちらかと言えば人間臭，或は，趣に欠ける感じがするのはやむを得ない。

人間自身，外に向かって開く精神よりも内に向かい思索する精神による方が，人間らしい味をかもし出せるという思い込みがある。

狭小空間を表現する語

広さが公的な感覚を含むとすれば，狭さはその

逆に私的な個人的内部の感覚に触れていく。

人個人の空間は膝，肘が当たる程の，鼻のつかえる狭さも可能である。そこから，自分の所有する空間を卑下して言う表現には狭小に結び付くものが多い。〈陋屋・ろうおく〉，〈茅屋・ぼうおく〉，〈掘建小屋〉，〈小屋〉などは直接的だが，〈あばらや〉だの〈草屋〉，〈庵居〉といった表現は同様に小さな空間の隠喩である。

もちろん，〈しもた屋〉，〈長屋〉，〈苫屋〉などと言う語も狭いという意味をまず伝える。しかし，そういった謙称語であっても〈草の庵〉や〈草堂〉，〈茅屋〉等々，手紙などによく使うそれは，大時代的な気取りの感覚を被っている。

もとより謙遜と自慢は紙一重の表裏に組み合わさってているものである。今日の日常会話で使い慣れない(聞き慣れない)語はむしろ尊大な響きを持つことも多い。

その大時代な語が過分に大げさな印象を与えるように，狭小空間そのものも，膨張しようとする精神をはらんだ心意気があることを感じさせる。

狭小空間にナイーヴな心で向き合うとき，われわれは濃縮された精神の密度とレベルの高さを暗示する気配が漂うのを感じ取る。

とはいえ，狭さを形容する語には，当然ながら，まず，否定的な響きが着いている。〈狭苦しい〉，〈せせこましい〉，〈手狭〉，〈狭隘〉，〈猫の額ほど〉といった表現からは苦々しい，遠避けたい響きを感じてしまう。

だが肯定的感覚をもって表現すると，それらは〈小振り〉，〈小ぢんまり〉となり，〈小ざっぱり〉，〈小綺麗〉等の状況的補足語が付加し，質素だがけれんみなく，本質的であるという感じを表そうとする語彙を造り始める。

広い狭いに関わる情報の語

また一方で，空間情報は読み手の状況，感覚を含んでしまうこともある。そこで，われわれは言葉に置換された情報から空間メディア特有の，読み手の色を見分ける判断も必要なのである。

いずれにしても，われわれはメディアとしての空間を読み取るにしても表現するにしても，広い狭いを表す語彙，あるいは広い，狭いが故に情報化されている資質を表す語彙を，教養として豊富に持ち合わせなければならない。

なぜなら〈広い〉，〈狭い〉と言う直接的表現語のみで必要な情報を十分に表せることはない。空間の情報は様々な要素が複合しているのであるから，空間言語も多くは複合した表現体となる筈である。

広い狭いは当初に述べたように，ごく基本的な空間資質であってみれば，広い狭いに関わる表現語もまた複合表現体の基本的部位を占めるに過ぎない。こうした複合表現の語彙については，今後別の機会に多様な空間事象を取り上げながら，関連性を明かにしつつ考察したいと考えている。

むすび

幾度となく述べることになるが，空間の広さの情報，つまり，その意味や価値は基本的で必然的なものである。

誰でも，何処でも，広さに関してはそれこそ否応のない判断に曝されてしまう。

一方，全ての人は広さに対するそれぞれの評価基準を持っている。その評価基準は時代的，社会的，或は身分階層的な価値観に基づいて日常生活レベルで身に付けたものである。

それ故に，もしわれわれが，空間の広さに個人的な資質のあれこれを語らせようとしても，そこには身分階層や育ちや生活の判断が，予断を生んで葬ってしまう。例え，予断を持たなくても一般的には，誰でも広さの判断だけでは単純な意味，価値の読みしかできない。

ただし，〈広さ〉に保有されている情報に色彩や素地仕上げ等の表す情報が組み合されると，いくらか違った状況（記号の膨らみ）が生れてくる。

例えば，千利休の待庵について記している二三の書を手にして，それぞれ待庵の印象記述が異なっているのに，たまたま出くわしたことがあった。

まず，［茶匠と健康］の中村昌生は次のように理解する。

「待庵に座すと，とても二畳敷とは思えない豊かな空間で，窮屈さを少しも感じさせない。天井の立体的な組み立や，入隅の柱をみせず塗廻す自由な手法によって，うまく狭さを忘れさすようにできている。…床（とこ）は，室床（もろどこ）といって，入隅を塗廻しかつ天井まで土を塗り上げた洞穴のような姿である。掛物は張付壁にという伝統を打破して，ついに利休は《荒壁に掛物面白し》と言い放った。そして床の天井を著しく下げて，掛物の制約を強化した。名物を掛けることを前提としない床野構えである…」。

それに対し，［利休・破調の悲劇］の杉本苑子は，にじり口から中に入り，秀吉を思いながら客座に座って，「あたりを眺めまわしてみて…しかし，少し失望した。床が，大きらいな室床なのだ。壁の入隅を壁土で塗り回して柱を消してしまう室床は，入隅の角度が鋭角的であるならばまだ救われるが，待庵の場合，はっきりと丸みをおびて見えるほど大きく塗り回してあり，しかも床天井が大変低い。このため床間全体がひどく鈍重な，暗い，厚手なものに印象されるのである。スサ壁はいい。でも框の丸太には荒々しい節が三つも出ている。それを，利休は《面白し》とし，また床天井を低く，入隅を大きく塗り回したことについても，かれなりの抜きさしならない断固たる美意識の基準があったのだろう。だが私には，節丸太の框を持つこの室床の重さゆえに，二畳隅炉（すみろ）という軽やかな茶室が，一方に傾ぎそうな不安感，不自然さが感じられるのだ。」

この両者の文章をみても，感じ方，読み取りは空間の大きさそのものから，形，仕上げ等に気を移し，その方に傾斜していくことが分かる。そして色彩や質感や形状などとの複合した要素のまとまったものの作用で空間の広さの価値判断も変容する。その結果，広さを含めての評価は，一方は肯定的になり，一方は否定的になる。

といっても錯誤があってはいけない。空間の広さが主要な作用をわれわれの意識に与えないのではない。空間の広さは空間の本質的情報としてわれわれに作用するが，あまりに本質的，第一義的であるが故に，必要以上の作用をもたらせず，平常な状態では，かえって表現を満たし得ないのである。

ところがその広さがネガティブに作用するような状態，つまり狭いとか広過ぎるとかいう状況になると表現の意味が強まり，情報としてクローズアップされる。

従って，人々にとっては自己領有の空間が広さにおいて平常ならざる状態の場合に，いろいろな感情や意識に取り付かれるのだと言えるが，それでも，人々が空間の〈広い，狭い〉に対して誇りや喜びや充足感を持ち，思想的確信や求道に没入したりする契機を得ることの重要さは理解しておかなければならない。

さて，問題が飛躍するが，現代は人口過剰と必要以上のものの氾濫に人間環境の疲弊状態が拡大しつつある。また，人間の無限の欲望増殖が人口過剰に輪を掛けて状況悪化を促進させているのをわれわれは目の当たりに見知っている。

人間一人一人の領有する空間の拡大化は，天に唾をするに以て，将来の人々を必ずや苦しめる。

今後は拡大より縮小を是とする思考が必要になってこよう。

望月の指摘するように，空間機能を可能な限り殺いでいく構えにこそ，希望があるのだろう。

その意味では，狭小空間であることの価値の有無を問うより，無駄を厭う精神，簡素な空間に沿う精神をわれわれの心の中に発見していくことが大切なことになるのかもしれない。

参 考 文 献

［空間の詩学］ガストン・バシュラール（岩村行雄・訳）／思潮社1969
［空間の経験］イーフー・トウアン（山本浩・訳）／筑摩書房1988
［人間と空間］オットー・フリードリッヒ・ボルノウ（大塚恵一・他訳）せりか書房1985
［流民の都市とすまい］上田篤／駸々堂出版1985（住居の貧しさ・他）
［住宅貧乏物語］早川和男／岩波書店1979

[住まいの戦後史－日本の住宅問題]塩田丸男／サイマル出版会1975
[空間の社会学] 加藤秀俊／中央公論社1976 (高密度社会のとらえかた)
[ラインの川辺] 犬養道子／中央公論社1976 (ヨーロッパ式の柱)
[日本のすまいⅠ，Ⅱ，Ⅲ] 西山夘三／勁草書房1975
[住まい考今学－現代日本住宅史] 西山夘三／彰国社1989
[歴史公論1980－1特集・日本人と家] (江戸の長屋／吉原健一郎) (昭和初期の住宅／山本明)
[住宅の逆襲③－日常へ]レオナルドの飛行機出版会1977(2DKの意味＝近代住居の内的構造／黒沢隆)
[兼行法師すまいを語る] 西和夫／TOTO出版1989
[小林一茶すまいを語る] 西和夫／TOTO出版1989
[南日本文化史] 川越政則／北山書房1950
[小住宅] 安東勝男／乾元社1946
[20坪までの住宅] 河東義之・佐藤昭五／立風書房1974
[住まいの人類学]大河直躬／平凡社1986(民家における「大きな部屋」)
[現代風俗'90 貧乏] リブロポート1989 (ワンルーム今昔／木股知史)
[都市民族学1・住まいと暮しの民族学] 望月照彦／未来社1988
[日本の美学・特集・空間…日本人の空間意識] ぺりかん社1991 (茶室空間の特異性／熊倉功夫)
[利休破調の悲劇] 杉本苑子／講談社1990
[茶匠と建築] 中村昌生／鹿島出版会1971 (千利休)
[日本住宅建築図案百種] 金子清吉／建築書院1913